

## 古活字版源氏物語 五十三冊

阿部秋生・上野英子

### 一、はじめに

黒川家旧蔵の古活字本『源氏物語』五十三冊〔蓬生〕<sup>注1</sup>は、一誠堂書店の手を経て、昭和二十五年本学に入った。爾来、黒川文庫本として襲蔵されている。本書は、川瀬一馬氏が「最古の源氏物語刊本」として紹介された龍門文庫蔵慶長年中刊古活字版本源氏物語（全五十二冊。うち六冊は補写）と同種の古活字本である。川瀬氏は『増補古活字版の研究』（昭和四十二刊）の中巻「補訂篇」の中で、

筒井久太郎氏の許で黒川家旧蔵の物語草子類を一見した中に同版本を見出で、龍門文庫蔵本に補写になってゐる巻の幾分を補ふことができた。

と述べ、更にその経緯についても

黒川家旧蔵書の中にあつた同種の一本は一旦筒井久太郎氏の蔵に歸し、後実践女子大学図書館に移つた。初め筒井氏の手に歸してゐた分は四十九冊で元来「蓬生」巻を欠いてゐたが、他の四冊は黒川家に殘留してゐたのを、その後黒川家の蔵書の殘部が一誠堂書店酒井氏に引取られた際、それを筒井氏旧蔵の分に併せる様運ばれ、現に五十三冊纏つてゐる。（八八六―七頁）と説明されている。『龍門文庫善本書目』（昭和二十七年、龍門文庫刊）に掲載されている「桐壺」「夢浮橋」の各巻頭写真二葉を見る限り、本書と龍門文庫本とは同板であることは認めうると思われる。

龍門文庫本については、川瀬氏によって詳細な報告がなされており、本書（黒川文庫本）はそれと同板と認めて然るべきであらうが、今回改めてこれを調査したので、その結果を報告しておく。従来報告されていることに若干の基礎的書誌ならびに本文の特

色について、何がしか付け加えうるものがあるかと思う。

## 二、書誌

全五十三冊。各一帖の分量の多寡にかゝらず、一帖を一冊に当ててある。一冊僅か四葉の「篝火」もあり、「若菜上」の如く一二四葉に及ぶものもある。然るに五十三冊になるのは、「蓬生」一冊が欠本だからである。猶、「柏木」は、十五丁まで、「源氏物語大成」でいえば、一二三八頁十四行目「世の人」以下を欠く落丁本である。

本書の寸法は縦約二五・六糎、横二〇・〇糎。縦の長さには冊によって〇・一から〇・四糎程度の相違がある。「総角」の本文二十丁目の一葉は綴じ込まれておらず、この一葉を差しはさんであるにすぎない。紙幅が一八・九糎と、他に他べて一・一糎ほど狭くなつていて、綴系に届かないのである。これは紙を裁断しそこねたものかと思われる。

各冊とも袋綴。料紙は楮紙か。遊紙はない。表紙には、茶地に草花の浮き模様をあしらった豪華な紙表紙を用いている。ところが同板とみられる龍門文庫本の表紙は青色で、模様等はないという。この相違は一体何を意味しているのか。単に色だけが違っているのならば、或いは表紙の色を替えて刊行したという可能性も考えられる。しかし模様、しかも浮き模様の有無の違いまでがあるととなると、その可能性は後退し、本書が龍門文庫本かのいずれかもしくは双方が、後代の再装であると判断せざるを得ない。そして結論を先に言えば、本書の装演は刊行当初の姿を伝えたものではないだろうと思う。

なぜなら、本書は全五十三冊中の大半にわたつて見返しの紙の糊がとれ、表紙の裏面が見えるようになっていたのだが、その中で「薄雲」と「少女」の二冊の表紙の裏に、浄土系仏典の解説らしき漢文の印刷が見えるからである。これが、もし「薄雲」の表紙裏にのみあるものならば、藤壺の死を描いた巻ということで特別の趣向を凝らしたものと解釈できないでもない。しかし「少女」にもあり、また逆に、藤壺以外の主要人物の死を扱った他の巻の表紙裏には何もないのだから、この推測は成り立たない。とするならば、これを刊行当初からの装潢と見ることは聊か無理があるのではなからうか。いやしくも発行者が自らの商品に對してかゝる不自然な趣向を施すことは考えにくく、自家用の本という気安さがあったからこそその処置と思われるのだが、確証はない。表紙表の体裁は五十三冊に共通しているから、再装されたとすれば、ある時期一斉に再装されたものであろう。

### ① 題簽

さて表紙の左上部には題簽を貼付してある。大きさ縦一七・九釐、横四・九釐。白地に墨でかたどった波模様、青・黄・灰色等を彩色したもので、茶の地に浮き模様のある表紙とあい俟って豪華な感じが出ている。但し「帚木」「空蟬」「若紫」「紅葉賀」「葵」「若菜上」の六冊には題簽がない。このうち「若紫」と「葵」を除く四冊には題簽を貼ってあった跡が残り、就中「紅葉賀」などは題簽の大きさの分だけ表紙の地色に変色していて、題簽はおそらく、ある時期全冊にわたって一斉に貼られたのであろう。

題簽には墨で、上半分に巻名、その下部に少し間をあけて巻の番号がしるされており、内題はない。またその題簽の筆跡をみると、丸味のある小さくまとまった字と、やゝ奔放なしかし決して鋭すぎるものではない字と、二様の筆蹟が認められる。題簽の筆者は二人かもしれない。更に巻名と番号であるが、題簽の中で両者は程よく配字され調和を保っているから、巻名と番号とは当初から併記されていたものと思われる。

## ② 番号

次に各冊表紙に記されている二種の番号について述べておく。本書には題簽と表紙右下端（綴糸の下近く）とに墨筆で漢数字が書いてある。説明の都合上、前者を「題簽番号」後者を「端番号」と仮称しておく。

さてこの両番号の筆蹟は歴然と違っていて、同筆とは認めがたい。次に、「若菜」上下の数え方に違いがある。題簽番号ではこの二帖を「卅四」「卅五」と数えている。<sup>注4</sup>端番号ではこれと違って、上下を共に「卅四」と数えている。端番号はここで一冊と数えてしまったために、最終巻「夢の浮橋」は「五十<sup>注5</sup>三」という数字で終わっているのであって、かゝる数え方はいわば或種の分類意識に基づくものと解され、題簽番号の所謂機械的な教え方とは性格を異にしていると言えるだろう。

つまり両番号は筆跡と数え方とに違いがあるのだから、この二種の番号はそれぞれ別人によって記入されたもので、その書きこんだ時期にもズレがあると考えられる。どちらが先なのか、その先後関係は不明である。だが、この二つの番号は次のような事実を示唆している。

前述した如く川瀬氏によって「最古の源氏物語刊本」と位置付けられたものは、現在のところ龍門文庫本と本書との二本だけであり、その二本が共に「蓬生」を欠いているので、この刊本では刊行当初から欠けていたのではないかという懸念を否定し切れなかった。しかるに本書に於ける二種の通し番号をみると、ともに「蓬生」に先立つ「潯標」を「十四」、後続する「関屋」を「十六」としている。このことは「蓬生」は「十五」であったこと、換言すれば、これらの番号が記された時点では「蓬生」が存在し

ていたことを意味するからである。

### ③ 本文

本文の板面の高さは約十九・八糎、漢字平仮名交り文で、一面十行、一行平均十九字ほどである。和歌は改行二字下げに書きはじめ、多くは二行分にわたるが、二行目は行頭から記し、地の文は多くはその二行目の歌につづいてはじまるという書式をとる。画・柱刻・刊記等はない。

### ④ 印章

印章としては、先ず各冊表紙右上部に、「物語」という文字を朱のマルで囲んだ印を捺してある。これは他の黒川文庫本にもあるもので、同文庫で捺された分類印であろう。

次の三種の蔵書印もある。

- ① 朱字・陽刻・長方形（縦四・五糎、横一・五糎）単郭「黒川真頼蔵書」  
② 同右 （ ） 同右 （ ） 同右「黒川真道蔵書」  
③ 朱字・陽刻・長方形（縦一・一五糎、横〇・九五糎）単郭

山三

この三印が捺された場所については

- A型……本文第一丁才右下に①②③が捺されたもの  
B型……表見返し左下に①、本文第一丁右下に②③が捺されたもの  
C型……本文第一丁才右下に②③が捺され、①はないもの

の三通りに分れる。C型は「匂宮」一冊だけにみられるもので、或いはA型またはB型の変型であるかもしれない。B型は「帯木」「空蟬」「末摘花」の三冊にみられ、他は全てA型である。

### ⑤ 書入

また「桐壺」から「末摘花」までの六冊には書き入れがある。各冊とも表紙の見返しには墨筆の注釈が、本文の行間・行頭には朱墨両筆の注釈が書き込まれ、本行には更に朱の句点がある。但し「末摘花」では九丁表五行目まで、六行目からは墨の読点に変わる。「桐壺」最終丁裏に「源有長書き入れ」の墨字があることから、これらの書入の中には彼の手になるものもある。就中、書入の大半を占める墨字の注釈等は、筆跡からみて有長のものではあろう。「源有長」について詳細は不明である。

この外、「葵」と「賢木」には歌の作者名を記した次の如き墨筆の小紙片がはさまれている。

「葵」〔十一枚〕……「源氏」〔11才〕「源氏」〔12才〕「みやす所」〔16ウ〕「源氏」〔17才〕「源氏」〔29才〕「源氏」〔29ウ〕「源氏」〔はしみや〕

〔36ウ〕「源氏」〔37才〕「源氏」〔43ウ〕「源氏」〔48ウ〕

「賢木」〔六枚〕……「源氏」〔6才〕「源氏」〔8ウ〕「斎宮」〔9才〕「みやす所」〔10才〕「けんし」〔10ウ〕「みやす所」〔11才〕

△注▽「」内は紙片に書きこまれた文字（ ）内は、小紙片がはさまれている場所を示す。

# ⑥ 表紙貼紙

最後に「桐壺」巻の表紙右肩部に糊付けされた貼紙（縦一六・二糎、横六・四五糎）について触れておく。そこには題簽とは別筆と思われる墨筆で次のように誌されている。

活字版

元和活字本

源氏物語全部五十四帖

右之内 巻の十五蓬生もしはたれつゝ

云々

之まき一冊 歛ス

虫損や白紙の黄ばみ状態などから察するに、この貼紙は近年のものとは思われない。だが再装後の表紙に糊付けされているもので、内容は、「蓬生」が欠本であることを指摘しているのだから、題簽や端番号よりは後の時代に加えられたものとみななければならないだろう。

またその内容についてだが、本書が整版ならぬ活字本であり、源氏物語五十四帖のうち第十五番目に相当する「蓬生」一巻を欠いていること、その「蓬生」が「もしはたれつゝ」という文章で書き出されていること等については問題がない。しかしこの貼紙に「元和活字本」とあるのを見ると、川瀬氏の、この本は「慶長年間中刊本」とする意見と対立することになる。慶長・元和は続

いている年代であるから、いずれの時代の作と考へても時期的には差はないが、しかし實際は、黒川文庫本を△最古の源氏物語刊本▽とする川瀬説との関連で、この推定年代の相違はさまざまな波紋を招くことになる。

やゝ唐突かもしれないが、ここで問題を整理しておいた方がよいかもしれない。

今日、源氏物語の初期刊本として知られているのは、黒川文庫本・伝嵯峨本・元和九年本の三本である。川瀬氏によれば、伝嵯峨本は元和九年本より古く、黒川文庫本はそれよりも更に古い刊本とされ、これらの先後関係については、現在までのところ異論は出されていない。

次に各々の成立年代についてであるが、最古の有刊記本源氏物語として知られる元和九年本については問題は無いが、伝嵯峨本の刊年については、慶長年間とする川瀬氏の説と慶長から元和にかけてとする和田維四郎氏の説との二つに分れている。

従つて、もし貼紙筆者が伝嵯峨本の存在を知らず、単に元和九年本との比較だけで、黒川文庫本はこれと同時代のものであると判断したのであれば、川瀬氏説との相違点は成立年代についてのみということになるだろう。しかし伝嵯峨本の存在も意識して、かつまたその成立を慶長期とみていたのであれば、川瀬氏説との相違点は、成立年代のみならず源氏物語初期刊本中に於ける黒川文庫本の位置付けについてまでも及ぶと言わねばなるまい。更に伝嵯峨本の成立をも元和期とみていたのであれば、初期刊本中に於ける黒川文庫本の位置付けについては沈黙を守り、黒川文庫本と伝嵯峨本とは共に元和期に成立した、換言するならば、源氏物語は元和期になって初めて刊行されたとする点で、川瀬氏説と大きく対立してしまうことになる。

無論、貼紙筆者が如何なる根拠のもとに「元和活字本」と判断したのか、今となつては知るよしもないが、ただ三種の初期刊本をみると、黒川文庫本の活字は固く稚拙で流麗さに乏しく、これが他の二本と同時代に作られたものとは考えられない。この件については問題点を整理・紹介するにとどめておくことにする。

猶、これまで述べてきた黒川文庫本の書誌を、一覧表にして掲げておく。

[illegible]

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
常 夏	螢	胡 蝶	初 音	玉 鬘	少 女	朝 顔	薄 雲	松 風	絵 合	関 屋	蓬 生	霽 標	明 石
17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	欠   <		



40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27
御 法	夕 霧	鈴 虫	横 笛	柏 木	若 菜 下	若 菜 上	藤 裏 葉	梅 枝	真 木 柱	藤 袴	行 幸	野 分	篝 火
17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	／	17.9 × 4.7 強	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7 強	17.9 × 4.7 強	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7	17.9 × 4.7
四十	卅九	卅八	卅七	卅六	／	／	卅三	卅二	卅一	三十	廿九	廿八	廿七
卅九	卅八	卅七	卅六	卅五	□	卅四	卅三	卅二	卅一	三十	廿九	廿□	廿七
25.6 × 20.0	25.6 × 20.0	25.6 × 20.0	25.6 × 20.1	25.6 × 20.0	25.5 × 20.0	25.5 × 20.0	25.7 × 20.1	25.6 × 20.0	25.6 × 20.1	25.5 × 20.0	25.5 × 20.1	25.6 × 20.1	25.5 × 20.0
23	82	17	22	15	122	124	28	23	45	17	33	22	4

／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A

落丁本  
題簽が斜めについている

補写



### 三、本文について

この黒川文庫本『源氏物語』の本文は如何なる性質をもっているだろうか。黒川文庫本と刊行年次の近い『源氏物語』刊本として知られている伝嵯峨本及び元和九年本の本文との比較を含めて、黒川文庫本の本文を検討してみようと思う。<sup>年7</sup>

池田亀鑑氏によれば、青表紙本であるか否かは、帖末に「奥入」があるか否かによって定まるとされている。この黒川文庫本・伝嵯峨本・元和九年本の三刊本の本文は、いずれもその奥入をもってはいないが、江戸時代の刊本であるから、いずれも青表紙本系統の本文であるのが普通のことである。また、これら刊本の「桐壺」巻の「太液の芙蓉、未央の柳」その他の部分は、明らかに青表紙本の本文の特徴をもっている。三本ともに青表紙本と認めてよからうと思われる。

しかし近年の調査によれば、青表紙本の本文そのものが必ずしも一様ではないと考えねばならないように思われる。例えば尊経閣文庫所蔵の伝定家筆で青表紙原本と考えられているものをはじめとして、鎌倉から南北朝書写の伝本六本に、室町期のものだが尊経閣文庫本の臨模本といわれている明融本を加えて、七本を使用しうる「柏木」の巻について調査してみると、これら七本の本文が既に一様ではない。大まかにいって、これら七本は①尊経閣文庫本と同系統と思われるのは明融本だけで、②残りの陽明文庫本・吉田本・横山本・榑原本は、青表紙本とは見るべきだろうが、尊経閣文庫本との間には、小さいがかなりの数の異同がある。中山本もこの②の中に入るかと思われるが、時にそうとも云い切れない異同がある——という二つの系統が考えられる。この七本の外に、室町時代書写本もあるが、それらの本文は、多くはこの①と②の間をゆきつもとどりつとして揺れている。大島本は尊経閣本のグループに入れてもいいが、例えば三条西家証本の如きは、①②いずれにも入れるわけにはゆかない第三の青表紙本である(阿部秋生「源氏物語の諸本分類の基準」昭和五十五年四月「国語と国文学」)。

このように、青表紙本の本文が更に二種、三種にわれるものであるならば、青表紙本といわれる黒川文庫本等の三刊本の底本は、この二種又は三種の本文のいずれであったのかということになる。先ず、黒川文庫本の「桐壺」の巻の本文を検討しようと思うので、「桐壺」の巻の青表紙本は一樣のものと考えてよいのかどうかを検討する。

「桐壺」の巻の青表紙本の諸本の本文も、「柏木」の場合のように、二種又は三種に分れるものなのかどうかを見る便法として、諸本の本文をある本と比較して、その異文数がどのくらいになるかを見ようと思う。異文の数を数える時は、異文をどこで区

切るかによってその数に違いを生じるであろうが、各本共に同じ基準で区切るならば、相対的なものであろうが、それを一応比較の目安とすることのできる数を知りうるだろう。先ず『源氏物語大成』校異篇桐壺の巻の底本池田本を基準にして、これと諸本との間の本文の異同数を数えてみると次のようになる。

(a) 池田本と諸本との異同数

諸本名	異同数
大 島 本	36
横 山 本	82
三条西家本	86
肖 柏 本	92
明 融 本	7

これによると、池田本に最も近い本文は大島本(36)である(明融本については後述)。逆に三条西家本(日本大学蔵)(86)と肖柏本(92)とは池田本からは最も離れている。横山本(82)は、この数字から見ると三条西家本・肖柏本に親近していると思われるが、横山本は多少癖の強い本なので、この関係だけを抛りどころにして決定することには不安を伴う。

(b) 肖柏本と諸本との異文数

諸本名	異同数
三条西家本	21
池 田 本	92
大 島 本	104
横 山 本	139
明 融 本	92

池田本から最も遠い形の肖柏本は、三条西家本とは非常に近い本文である。それと反対の極に大島本・池田本・横山本がほぼ一団をなすかに見えるが、更にその中では横山本が大島本・池田本からやや離れているとも云いうる。そこで、これら諸本の独自異文数を比較してみると次のようになる。

(c) 独自異文数

諸本名	異同数
横山本	62
大島本	22
肖柏本	12
三条西家本	3
池田本	2
明融本	0

横山本が、際立って独自異文を多く持っているということは、横山本が他の諸本とはかなり隔たった本文を書写したか、横山本系統本の書写者が本文をかなり自由に改訂したためかであろうが、いずれにしても、現在の横山本は他の諸本とはかなり距離のある本文であることを意味する。前表(b)から抽出されたところの、横山本と肖柏本との間の異文の数が池田本・大島本と肖柏本とのそれにかかなり近いが、上まわっているという結果は、横山本の本文が池田本・大島本に近いことを意味するわけではなく、むしろ肖柏本が横山本から非常に遠い本文であることを示唆するものであったのだと思われる。

(d) 横山本と諸本との異同数

諸本	異同数
肖柏本	139
三条西家本	131
大島本	106
池田本	82

この表によってみても、横山本と最も遠く離れているのは肖柏本であり、三条西家本がこれに次いで遠いと認めざるをえないと思う。

これら(a)(b)(c)(d)各表の意味するところによると、池田本と大島本とが一つの組をなし、肖柏本と三条西家本とが別の組をなし、横山本はこのいずれの組とも離れて、また別の系列の青表紙本とすべきもののように思われる。

もう一度(a)表に戻してみると、池田本と明融本との間には「桐壺」全体の中で七つの異文があるにすぎない。また(b)表によれば、肖柏本と明融本との間にも九二の異同がある。数え方によって多少変わるだろうが、この数は肖柏本と池田本との間の異同と一応同数である。この二つの表によると、池田本と明融本とは最も近い本文を持っているというべきである。

明融本は、池田亀鑑氏が定家の青表紙本を臨模したものであるとして、青表紙原本に准ずる本文と認め、『校異源氏物語』を『源氏物語大成』校異篇として刊行する際には、その校異を「補遺」として各冊の末尾に加えた。この青表紙本臨模説は、少なくとも「柏木」については、二・三の疑問点もあるが、およそその線において認めうるだろう。この「柏木」の場合、青表紙原本とするのは前田家尊経閣所蔵の伝定家筆青表紙本である。この前田本「柏木」とこの明融本「柏木」との本文を比較すると、①各面の行数・一行の字数は勿論、②書体 ③字配りのみならず、④誤記・脱字かと思われるところもそのまゝに模写しているもので、単なる模写本というよりは「臨模本」と称せられていることを承認してよからうと思われる。但し、明融本には臨模後に他本と校合した跡と思われる朱書・墨書の行間の書き入れもあり、その他の誤記も多少あるので、青表紙原本と多少異なるところもあるが、それらもこの本文が臨模本であることを否認するものではない。この巻の筆跡は線が細かく鋭いが、定家の筆をまねた一筆で通している。

「柏木」以外の明融本も、多くはこの定家風の書体であるが、巻によって筆跡の異なるものもある。例えば「若菜上」の第一丁才は明融本「柏木」の筆跡と同じだが、第一丁ウ以後の筆跡はこれとは異筆で、定家風の面影が全くみられない筆跡である。

「桐壺」は冒頭一丁オウと第二丁オ以下とで筆跡が変わっている。冒頭一丁の筆跡の方が筆太で、第二丁以下の方は線が細く鋭い感じである。別筆だが、定家風の筆癖をみせた筆跡という点では共通している。ついでにいえば、「帚木」も第一丁才が「桐壺」冒頭一丁分と同様な筆太のもの、第一丁ウから「桐壺」にもある線の細い筆跡に変わる。この「桐壺」「帚木」に見られた後者の筆跡は、「柏木」全体の筆跡や「若菜上」の冒頭一面の筆跡と同じものと認められる。「桐壺」「帚木」両本の冒頭の筆跡は相互に似てはいるものの、同筆と断定するには困難な箇所もある。

筆跡ないし書写態度からみると、明融本「桐壺」の冒頭第一丁オウを除く三四丁分の本文と、その後二丁半の卷末勘文の筆跡は、明融本「柏木」の本文四九丁と卷末勘文一丁の筆跡と同筆と思われ、その書写態度も同じであろうかと思われる。このように、青表紙原本かといわれる尊経閣本の臨模本「柏木」と「桐壺」とが同筆と思われ、書写のしかたも共通していると判断される以上、「桐壺」もまた、青表紙原本的な書本を臨模したものと無条件に認めうると断定することは出来ないにしても、少なくともこれもある青表紙本をかなり忠実に書写しようとしたものであろうかとまでは云い得るのであろう。

このことと(a)(b)(c)(d)各表から知り得ることを重ね合わせてみると、「桐壺」の青表紙諸本の中では、池田本・大島本と明融本とが非常に近い本文をもった一つの組で、おそらくこの組の本文が他の組の本文よりは、最も青表紙原本に近い本文ではなからうかと思われる。この組の本文と最も遠い本文をもっている青表紙本は肖柏本と三条西家本との組である。横山本の本文が、この両組の中間に位置を占めることになる。いずれも大きく括れば青表紙本であるが、その青表紙本の中に

(1) 池田本・大島本・明融本

(2) 横山本

(3) 肖柏本・三条西家本

と小分けしうる三通りの本文があるということになるものようである。(1)と(2)とは少なくとも鎌倉時代に既に対立していたものと思われ、(3)はそのいずれにも所属しえない本文である。かゝる三種の青表紙本文がどうして発生したのが、青表紙本を考える時の問題だろうが、その問題はここではしばらくおく。だがこの三種の青表紙本があるとなると、黒川本『源氏物語』の本文の性質を問うとは、この(1)(2)(3)の中のいずれの系統に属するのかを検討することである。

先ず、「桐壺」の冒頭の本文異同の中にこの三刊本の本文をおいた時、如何なる様相を呈するのを見ると次のようになる。

① 思あかり給へる（桐壺 五—②）

イ おもひあかり給へる—池横肖三明黒嵯元

ロ 思ひあかりたまひつゝ。る—大

掲出したのは『源氏物語大成』校異篇の本文である。見出語下の（ ）内にはその頁数（漢数字）と行数とを示し、諸本の略号は校異篇に採用されているものはそれをそのまま踏襲した。校異篇では池田本（池）を底本とし、横山本（横）肖柏本（肖）三条西家本（三）大島本（大）「桐壺」は飛鳥井雅康筆ではない）の四本が校異に用いられている。それに新たに明融本（明）の本

文を加えた。但し漢字と仮名の差、仮名遣の差などは区別せず、同じ訓みになると思われるものは同じ項にまとめた。黒川本は黒、伝嵯峨本は嵯、元和九年本は元とした。

①は大島本の見消ちだけのことで、全本が結局はイの形をとっているものである。黒川本・伝嵯峨本・元和九年本もそのイの形であることに変わりはない。

② 心をのみ（桐壺 五—④）

イ 心をのみ—池大明黒元

ロ こゝろをのみ—横

ハ 心を—肖三嵯

ここでは、伝嵯峨本は肖柏本・三条西家本と同じ形であるが、黒川本と元和本は池田本・大島本・明融本と同じである。

③ おもほして（桐壺 五—⑥）

イ おもほして—池横大明元

ロ おほして—黒

ハ おほゝして—肖三嵯

「おほゝし」は「おもほし」の変化した語で、平安時代にも用いられていたとする辞書もあるが、確実な用例をまだ見ていない。このこのハはすべて室町時代の写本での形である。伝嵯峨本が肖柏本・三条西家本と、元和本が池田本・明融本・大島本・横山本と同じ。黒川本が独自異文である。

④ ひきいてつへく（桐壺 五—⑩）

イ ひきいてつへく—池横大

ロ ひきいてつへく—明<sup>（巻）</sup>

ハ ひきいてつへう—肖三黒嵯元

黒川本・伝嵯峨本・元和本共に肖柏本・三条西家本の形である。

⑤ 御心はへの（桐壺 五—⑩）

イ 御心はへの—池横大肖三明黒元



ロ 御心ハへ。―嵯

伝嵯峨本の「の」は後筆のように思われる。とすると独自異文であるが、「の」を不用意に脱落させたものではあるまいか。つまり、黒川本・元和本と同じと考えてよいのではあるまいか。

⑥ ちゝの大納言はなくなりて（桐壺 五―⑫）

イ ちゝの大納言はなくなりて―池肖大明黒嵯

ロ ちゝの大納言はなくなりて―三

ハ ちゝの大納言はなくなりて―横

ニ ちゝの大納言なく成て―元

断定は出来ないが、ロの「ちゝの大納言」は、「父大納言」とあった本文による訓みではあるまいか。つまり、イロは同じものと考えてよいのではないか。とすると、ここでも、黒川本・伝嵯峨本は肖柏本・三条西家本と同じ本文ということになる。元和本は「は」を書き落としたのではなからうか。

⑦ いにしへの人のよしあるにて（桐壺 五―⑫）

イ いにしへの人のよしあるにて―池横三大明黒元

ロ いにしへの人のよしあるにて―肖

ハ いにしへの人のよしあるにて―嵯

伝嵯峨本の「の」は後からの補筆かと思われる。とすると、伝嵯峨本はロの肖柏本の形になる。その肖柏本の「いにしへ人」は、河内本をとったかに見えるが、むしろイの「いにしへの人」の「の」を書き落としたのではあるまいか。

⑧ いたうおとらず（桐壺 五―⑬）

イ いたうおとらず―池横大明

ロ おとらず―肖三黒嵯元

この項では、黒川本・伝嵯峨本・元和本共に肖柏本・三条西家本の組に入っている。

⑨ うしろみしなければ（桐壺 五―⑭）

イ うしろみしなければ―池横大明

ロ 御うしろみしなれば―肖三黒嵯元

伝嵯峨本の「御うしろみし」の強めの「し」は、補筆である。本行は「御うしろ見なければ」の形になる。⑨の異同例には示さなかったが、「御うしろみなければ」の本文は穂久邇文庫本にも見えており、両本ともに「し」を落としたものかもしれない。すると、三刊本全て、肖柏本・三条西家本の組に入ることになる。

この結果を表示すると

	元和本	嵯峨本	黒川本
池田本 大島本	3	1	4
横山本	3	0	2
肖柏本 三条西家本	4	5	4

ということ、多少肖柏本・三条西家本の組に属するものが多いかにみえるが、これだけでは決定的な結論を出すことは無理である。しかしこの調査を「桐壺」全体に及ぼして、三刊本の本文と他の諸本の本文との異同数を出してみると次のようになる。

(a) 黒川本と諸本との異同数

横山本	119
元和九年本	92
伝嵯峨本	77
大島本	73
肖柏本	61
池田本	59
三条西家本	53

(b) 伝嵯峨本と諸本との異同数

横山本	159
大島本	124
池田本	99
元和九年本	98
黒川文庫本	77
肖柏本	68
三条西家本	59

(c) 元和九年本と諸本との異同数

横山本	172
大島本	121
池田本	108
伝嵯峨本	98
黒川文庫本	92
肖柏本	85
三条西家本	76

右の表によると、三刊本はいずれも、最も異同の少ないのは三条西家本である。次いで(b)(c)ともに肖柏本である。(a)の黒川本の場合も、池田本の59、肖柏本の61の少差を無視すれば、ほぼ(b)(c)同様に見ることができないではない。本来一つであるべき青表紙本の中での(1)(2)(3)の系統であるから、きっかりと三つに分れるわけではないが、およその傾向としては、近世初期のものと思われる『源氏物語』の三刊本の本文は、いずれも第三の青表紙本を、就中三条西家系統の伝本の本文であったかと思われるということは出来るだろう。

この三条西家本は「桐壺」巻末に

大永五年六月廿七日書写之

古本關故雅康卿筆也 卅三枚

享祿三年六月廿七日読合入落字等了

とあり、「花宴」巻末には

本肖柏筆

以京極黃門定家卿自筆校合畢

享祿三年正月十九日書写之了

奥入以別帛写之 三月廿八日一校了

桑門堯空七十六歳

とある。この他にも各巻末に奥書もっているところがある。山脇穀氏によれば、この三条西家本の「桐壺」から「紅葉賀」までの筆者は三条西公条であるといひ、<sup>注8</sup>三条西公正氏もこの説を支持している。<sup>注9</sup>「花宴」の奥書は実隆の筆といわれ、肖柏筆の伝本を書写し、それを定家自筆本で校合したとあり、しかも奥入は別紙に書写したというのであるから、青表紙原本というべきもので校合したことになる。実隆の最晩年七十六歳の時完成した三条西家の証本である。

宗祇・肖柏からはじまっていたかに思われるが、実隆において形成された三条西家学ともいべき源氏学は、その後公条―実枝と継承され、これら黒川本等刊行当時における源氏物語研究に圧倒的な勢力を持っていたことを考慮するならば、これらの三刊本の本文が共通して三条西家本の本文に最も近いという徴証を示していることは、甚だ自然な趨勢というべきかと思われる。

近世初期の三刊本の本文が、いずれも三条西家本に近いと見てよさそうとなった。次に、この三刊本の本文相互の親疎関係はどう考えておけばよいのか。ここで刊本と写本とをあわせて、全本の本文異同を数えてみた。前掲の表(a)(b)(c)に、異同数の多いものから順に配列しておいた。これによると、黒川本にとっては(3)三条西家本・肖柏本と共に、(1)池田本・明融本・大島本が、また伝嵯峨本・元和九年本にとっては(3)三条西家本・肖柏本が、他の刊本よりも近い本文であると考えうる余地がありそうである。

注1 川瀬一馬『日本書誌学之研究』（昭和十八年・講談社）所収「最古の源氏物語刊本の発見」

注2 例えば現存する伝嵯峨本源氏物語であるが、その表紙には内閣文庫本・京大蔵本・東洋文庫蔵本・安田文庫蔵本・高木文庫蔵本にみられる如き、淡青色に小紋雲母模様をあしらったものと、金子氏・大島氏蔵本にみられる如き、卵色に小紋雲母模様をあしらったものがある

注3　り、同本の原装には刊行当初から二様あったかといわれている。題簽のはがれた跡に、かつて外題の印刷されたらしき根跡は全くみられない。

注4　「若菜上」に題簽はない。但しその前の「藤裏葉」が「世三」、その後の「若菜下」が「世五」としてあることから、おそらくは「世四」という数字がうたれていたのだろうと推測した。

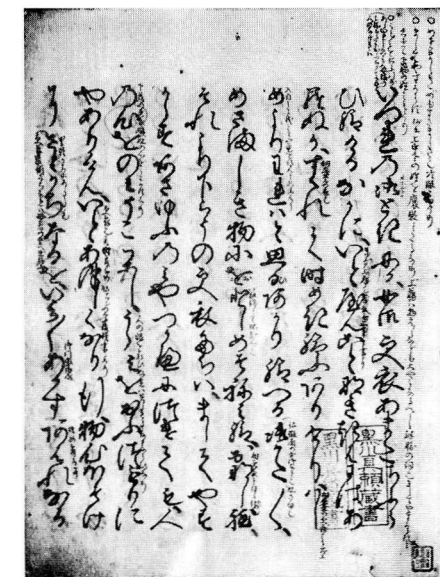
注5　「若菜下」は端が欠損しているため、数字は読みとれない。しかし「若菜上」を「世四」、「柏木」を「世五」としていることから、「若菜下」も「上」と同じ「世四」とうたれたのであろうと判断した。

注6　体系的な嵯峨本研究の嚆矢として著名な和田氏は、その著書『嵯峨本考』（大正五年　審美書院）四十九頁に於いて、嵯峨本源氏の活字が「元和九年五月中旬心也開板」なる奥付をもつ『狭衣物語』のそれと酷似していることから、後者は前者の活字をそのまま襲用したものであり、とすれば両本の刊行年はあまり隔たらず、伝嵯峨本源氏物語は慶長から元和のはじめにかけて刊行されたものであろうと推定している。

注7　伝嵯峨本は東大図書館所蔵本、元和九年本は東洋文庫所蔵本を閲覧することができたので、これらに拠ることにした。

注8　「三条西家証本源氏物語」（『芸文』大正十四年七月、『源氏物語の文献学的研究』所収）

注9　三条西公正「証本源氏物語の原本に就いて」（『国語と国文学』第七三）



口絵10 「古活字版源氏物語」「桐壺」  
冒頭



口絵9 「古活字版源氏物語」「桐壺」  
表紙